



2025年

5月第3・4週の主日礼拝説教要約

・5月18日 マタイ福音書 5：1 - 12 .

『 幸いなる者 』

・5月25日 マタイ福音書 5：33 - 37 .

『 誓約と真偽 』

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

《 幸いなる者 》

主の言葉を悟った人は恵みを見いだす。幸いな者とは、主に信頼する人。（箴言16：20）

今日の聖書の場面は、マタイ福音書のイエスの山上の説教の一部です。イエスの言葉を悟って「恵みを見いだす」人はいたのでしょうか。その人がイエスを信頼し、「幸いな者」となれたのでしょうか。

山上の説教を語りきって、下山する時が来て、

イエスが山から下りられると、大勢の群衆が付いてき来た。

（マタイ福音書8：1）

とあることから、彼らこそが、弟子たちと共にイエスの説教を聞いていた聴衆だったことが分かります。

後に、4つの福音書すべてに出てくる伝承で、イエスが5000人もの人々の空腹を満たした時の記事がありますが、これらの情報を総合的に判断すると、給食の場所はおそらく、ベツサイダの近くのどこかの山上だったようです。今日の山上の説教の場面とも重なり合う風景から察すると、いずれの場面にも、山を登って腹をすかした人々がいたことは想像に難くありません。となると、“給食”をともなわなかった今回の説教だけで、「主の言葉を悟った人」が「恵みを見いだす」に至ったケースはあったのでしょうか。イエスに追随して下山した人々（8：1）はそれから、いったい何を求め続けていたのでしょうか。

心の貧しい人々は、幸いである、天の国（＝神の国）はその人たちのものである。

悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる。

へりくだった人々は、幸いである、その人たちは地を受け継ぐ。

義に飢え渴く人々は、幸いである、その人たちは満たされる。

憐れみ深い人々は、幸いである、その人たちは憐れみを受ける。

心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る。
平和を造る人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。
義のために迫害された人々は、幸いである、天の国（＝神の国）は
その人たちのものである…（マタイ福音書 5：3 - 10）

これらの（幸いな）人々とは、イエスの眼前にいた人々であったのか、
イエスの肉声で、神の言葉を聞き、悟り、「恵みを見いだす」ことのできた
「幸いな者」となれた人々だったのか、残念ながらどこにも確証めいた
記述は見当たりません。しかし、福音書記者（マタイ）は、イエスのこれ
らの神の珠玉の言葉を確実に後世に遺すことを忘れませんでした。そこには
「神は愛（1.ヨハネ書 4：8b）」であることが、あますところなく示さ
れていたのです。

《 誓約と真偽 》

あなたがたは、「然り、然り」「否、否」と言いなさい。それ以上
のことは、悪から生じるのだ。（マタイ福音書 5：37）

今日の聖書箇所の小見出しは、「誓ってはならない」というものです。
引用した 37 節の内容からすると、“誓い”は、余計なことで「悪から生
じる」ことになりそうです。「誓ったこと」を主にたいして果たすことが
できなければ、それは「偽りの誓い」になると。

また、“誓い”は必然的に結果をとともなうもので、これは「明日のこ
とを思い煩うな」というイエスの戒めにも抵触（？）するのかもしれませんが。
おそらく誓いを聞く相手（張本人）である神ご自身ならいちばん、“その
（人の）結果”を熟知しておられることを人間は悟らなければなりません。
誰かが言ったように、戦争が 3 日で終わり、平和が訪れることはなさそう
です。もちろん、世界平和を希求することは大切です。

さて、この問題と、「然り」と「否」とが、どう結びつくのでしょうか。
こちらはけっして“能動的な態度”とは言えません。問いに対する“答”

なのか、それとも何かに対する“評価”をも含むものなのか。具体性に欠ける指示であることは確かです。ただ、こちらも“誓い”と同じく、人間の、神（含：神的なモノ？）に対する態度に限って語られているのだとすると、説明がつくかもしれません。

神的なモノには、本来、“聞く耳”など存在しませんからこちらは論外としても、唯一の神ご自身が聞き届ける、人間の言葉の中で、許容範囲におさまるものがあるとすると、それが「然り」と「否」なのかもしれません。言い方をかえれば、不完全な存在である人間が正直に、神に相對する時に、自らの行動に関して、正確に予測や計画を立て、これを成し遂げようとしても、様々な要因が重なりその経過や結果が左右されることになり困難に直面すると、その都度、変更を加え、これを言語化して祈ったり、誓いを立てたりしても、埒が明きません。それでも、もし、際限なく人が誓いを立て、祈り続けるのだとすると、神はこれを聞き届けることを、差し控えることになるでしょう。神と人（＝イスラエル）との歴史においては、“神の沈黙”が、これとよく似た状況からも生じていたと考えられます。

知識もないまま言葉を重ね、主の経綸（計画）を暗くするこの者は誰か。（ヨブ記38：2）

この時、ヨブは幸いにして、彼個人と相對する神の（怒りの！）声を聞くことになりましたが、この“神の怒り”は、屢々、“神の沈黙”となりイスラエルを不安と絶望に陥れたことがありました。

「知識もないまま言葉を重ね」る人間は、ヨブにとどまらず、今日も絶えることがありません。

神の沈黙を招く前に、人間が一時、沈思黙考して、自らを顧みることが肝要なのかもしれません。